

---

# 短編集(パラレル主体)

界軌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集（パラレル主体）

### 【Zコード】

Z9720S

### 【作者名】

界軌

### 【あらすじ】

思いついた端から投稿していく短編になります。別に投稿している小説のパラレルが主体となるので、そちらを真面目に読んで下さっている方にはあまりお勧めしません！というより、目の毒です。完全なお遊びです。……今気付きましたが、パラレルって既読じやないと意味分からぬですよ。

## カフHでの「じてーお付き合い」の進め方指南（失敗）（前書き）

注意！ 別に投稿している作品のパラレルになります。  
がっかりすること請け合いなので、そちらを読んでいる方にはあまりお勧めしません。

## カフフの「ひーお付き合」の進め方指南（失敗）

とある日の、昼下がり。

とあるカフフのオープンテラスに目立つ青年が一人が座っていた。一方は某大企業の跡取りである透。彼の前にはコーヒー カップが一つ置かれている。

向かい側には彼の幼馴染み、某会社社長の令息、海が座っている。彼の前には「コーヒー カップと、三種類のケーキが載ったプレートが一枚あった。

「だからさあ」

チヨ「トレーテーキを突き刺したフォークをこちらに差し向けて話す友人、海を、透は胡乱げな目つきで見た。

「お前のやり方じゃ、ダメだつてんだろ?」

「何が悪いと?」

田を細めて透が聞けば、海はケーキを口に突っ込んで「ふう〜ん……」と腕を組む。

「コーヒーを啜る透は、よもや何も考えずに話始めたんじゃないかな」と疑いのまなざしを送り始めた。

そこで海はようやく口の中のケーキを飲み込んで、すっと息を吸

つた。

今度はアップルパイを突き刺したフォークを透に向ける。

「積極性だ！」

「……かなり積極的にやつていいつもりだが？」

会えば、一人きりになれるよつに散歩に誘つことは欠かさない。  
最近は手も繋げる様になった。

実際、目の前の幼馴染みさえ邪魔しなければもう少し距離は縮まつていただろう。

「お前なあ。一田惚れして、早半月だ。それで手を繋ぐ程度で満足している気か？？」

「……満足はしていない。する訳ないだろ？……？」

「…………」

透が浮かべた笑みに、海は固まつた。

この笑みをどう形容するのが適當か、言葉が出てこない。

だから彼は堅物の幼馴染みに「これだけを言つ事にした。

ほん、と透の肩に手を置く。

「お前も男だと初めて思い知つたよ」

「…………」

「つ…………！」

透の肩に乗せた手に、無言で関節技が決められた。

反り返った手首の痛みに悶え苦しむ海は、切に願う。

頼むからこいつの地味ーに暴力的な側面を大人しくさせてくれ、  
舞李！

## カフHでの「J」と「お付き合い」の進め方指南（失敗）（後書き）

読んで頂き有り難うございました。  
本当に気分転換用に書いています。あは……。

## カフヒやの「じーんな女の語りこ」（前書き）

注意！引き続き他の作品のパラレルになります。  
そちらを読まれている方は、がっかりしたい場合のみお読みください。  
笑。

## カフフの「じーん女の語らい」

とある日の、昼下がり。

とあるカフフの店内、奥まった席に少女が一人座っていた。

一方は進学の為に最近この街にやつて来た雛季。彼女の前にはティーカップと半分に減ったタルトタタンが置かれている。

もう一方は雛季の親友の星奈。実は少女と呼ばれる年齢は過ぎているのだが、童顔のせいで雛季より僅かに上くらいにしか見えない。彼女の前にもティーカップとチョコレートケーキがあつた。

「んん~つ。このタルトタタンは絶品ー。」

雛季が幸せそうに呟つ。

皿の前の星奈にも皿を寄せて勧めた。

「星奈も食べて食べて。すつゝんく美味しいからー。」

「じゃあ、一口……」

自分のフォークで一口サイズに切り取つて口に運ぶ。

「ー……美味しいー。」

「ね、ねー。」

「カラメルソースがぱりぱりしてる。何、これは？」

少し焦げた部分の香ばしさとしつかり煮込まれたリングの甘さはまさしく絶品と呼ぶに相応しい味だった。

しばし一人はその味に感じ入る様に黙っていた。

そこへ男性の店員が寄つてくる。

「水はいかがですか？」

聞かれた二人はちつとも水の減つていらないコップを見て首を振つた。

「いいえ、結構です。有り難うござります」

ほんわか笑つて難李は断る。

店員は残念そうに去つていった。

「……さつきからよく水を勧められるね。光の加減で減つているようを見えるのかな？」

自分のコップを持ち上げてとぼけた事を語つ親友に、星奈は呆れた溜め息をついた。

あの店員だけじゃない。この店にいる男性たちの多くはずっとこちらをちらちらと伺つてゐるのだ。

まつたくもうー、この娘は自分が他の人からどんな風に見えてい

るのか全然気にしないんだから。

それも仕方が無い、と星奈は思つ。

何しろ雛季がいたところはとんでも田舎だそうで、彼女の姿を  
もてはやす様な人間はいなかつたらしい。

そのど田舎では頭の良い雛季は進学がままなら無い為、止むを得  
ずこの街まで出て来たのだ。

現在は遠縁である星奈の祖父のところに身を寄せて、勉強中。

息抜きに街に連れ出せばこの通り、男性陣の目を引きつけても氣  
付きやしない。

ちなみに、彼らの視線は連れである星奈にも向いているが、本人  
は何も気付いていなかつたりする。似た者同士の一人だった。

「それで、あの人たちとはまだ会つているの？」

「ん？ 透と海のこと？」

「そう

雛季が嬉しそうに「友達が出来た」と星奈に報告して来たのは半  
月程前の事だ。

公園で散歩中に出会つたらしい。そしてその後も何度も会つてい  
ると。

雛季は度々紹介したいと言つが、医師の卵として務めている星奈は毎間に出掛ける事は中々出来ず、未だに彼らに会つた事は無い。

「うん。明日は、会えるかな……。あ、でも。もうすぐ忙しくなるからあんまり会えなくなるかも知れないって言つてたの、よ、ね……」

「……」

話している間に、しょんぼりと雛季は肩を落とした。

折角出来た友人に会えなくなるのはさぞかし寂しいだろ？

けれど、やがて彼女は笑いながら顔を上げた。

「でも、明日なら星奈も一緒に行けるよね。紹介するね」

その幼げな笑顔に笑みを返して、星奈も口を開く。

「そうね。……そうだ、午前中にタルトタタンを作つて持つていく？きつと義姉さんなら作れるわ」

「いい考えね！海は甘いもの大好きだけど、透は苦手だから、甘さ控えめにして。紅茶も持つていけばいいね」

すっかり寂しげな雰囲気を払拭して雛季は笑つた。

彼女が笑うと胸の奥が暖かくなる。星奈も満面の笑みを浮かべた。

しかし、心の端っこには一抹の不安が残る。

……透と海つて、どこかで聞いた事があるような気がするのよね。

……いえ、良くあるお詫びだわ。うん。

## カフフの「ルーナの語り」（後書き）

読んで頂き有り難うございました。

三話で一つにしようかと思立ち、前話のサブタイトルを修正しました。

次でカフフの話は一段落のはずです。  
その後書きで何の作品のパラレルか、とかの説明を載せようかと思います。

カフュでの「」と初対面の攻防？（前書き）

「カフュでの「」と」最終話になります。

## カフェでの「」初対面の攻防？

とある日の、昼下がり。

大通りに面したカフェでお茶をしていた雛李と星奈は、「そろそろ帰らうか」と腰をあげた。

会計を済ませて店を出る。

店の外に並べられたチョアやテーブルを見て、スウリはつんつんと星奈の袖を引っ張つて言った。

「ね、今度はオープンテラスで食べよう。晴れいたら気持ち良さそう」

楽しそうに言う彼女につられて笑みを浮かべた星奈は、そのオープンテラスの一席に目が行つた。男が一人立ち上がつたのだ。

むむ。背が高いわ……。

小柄な星奈にしてみれば、分けて欲しい程の長身だつた。もう伸びないと思つと余計に欲しくなるものだ。

次の瞬間、こちらに向けられたやたら綺麗な顔立ちに目を見張つた。

「あ

隣であがつた小さな声に気付かない程驚いていた。

三つのケーキを残さず平らげた海は、腕時計を見た。大企業の跡取り息子である透には、この後出席しなくてはいけない会議があるのだ。ボディーガード兼秘書的な仕事をしている海には彼のスケジュールを管理する義務がある。

だから、化け物でも見る様な目でこちらを見ている透に声を掛けれる。

「おー。そろそろ時間だぞ。行こう」

「……ああ」

甘味嫌いの為、目の前でケーキを三個も完食されて多少気分の悪くなっていた透は頷いた。

だが、海の言い方はまるで透の意思でここに居たと言つ様に聞こえたから、一応訂正しておく。

「そもそもお前が腹いじりえだなんだと言つから入ったんだろうが……」

呆れた口調で言つも、幼馴染みが堪える様子は欠片も無い。

「えー。頭使うときは甘いものが重要だら? ハネルギーを補給しないともたないって」

「頭を使うのは俺であつてお前ではない。低燃費の大食らいめ

「あ、ひでー！秘書っぽいことだつてしてるだろ？？」

「ああ、この間は宗谷がお前に資料作成を丸投げされたとぼやいていたのを聞いたぞ」

冷静な一言に、海の顔が「やべつ」と歪む。

面倒な事は他に回す、それがやたら上手いのが彼だつた。

するとそこで、透は店の中から出て来た人物に気がついた。と言つよりも、勝手に視線が引き寄せられた。

席を立つて、自然に顔に微笑みが浮かぶのを感じていた。幼馴染みの不審の眼差しなど目に入らない。

向こうも気がついて、「あ」と驚いた顔をした。けれどすぐに小さく首を傾げて笑い返して来た。

「透。海もいるのね」

彼女、雛季は、嬉しそうに言いながらデッキに上がつてくる。

唐突に席を立ち、なつかつ優しげに微笑んだ透を、ぽかんと見上げていた海はその声に振り返つた。

「あれ、雛季？ 奇遇だね」

その後、「なるほどねえ」と続く。もちろん透が微笑んだ原因が

判明したからだ。

彼らのテーブルの脇に立つた雛季は「こんじけな」と行儀良く挨拶した後、自分の後ろに着いて来ていた星奈を示して言った。

「彼女とお茶をしていたの。お店の奥でね」

海は立ち上がりもせず、星奈をしづしづ眺めると、ぱちんと指を鳴らした。

そのままその指を彼女に向けた。

「わかった、星奈だ。そつだろ？？」

名前を言い当てられた星奈は「な、なんで……」と動搖する。

その問いに答えたのはよつやかく雛季から視線を外し、無表情に戻つた透だった。

ただし、答える前に海の指を変な方向に曲げるのを忘れない。

「いえつ……？」

奇妙な呻き声には、「人を指差すな」と注意する「こと」も忘れない。

それから高い位置から星奈を見下ろして、体温の低そうな声が言う。

「雛季が何度も話してくれた。よつやかく会えたな」

差し出された手に、星奈は戸惑いながらも応じる。

隣では雛季がニコニコと笑っている。

「明日なら会えるわね、って話していたところだったの。まさか今会えるなんて思わなかつた」

「俺も、雛季が街に出てくるなんて思わなかつたー」

まだ痛そうに指を擦りながら海が言った。

「星奈が誘ってくれたのよ。そうでないと、きっと迷子になっちゃうもの。慣れないところは、まだやつぱり不安だし」

その会話を聞きながら、星奈はひとつも気になつてこないと聞く事にした。

透と軽く握った手は、丁重に、しかし早々に離されていった。

「あの、貴方は コーポレーションの、……」

そこまで言つて、星奈は固まつた。

ひぢらを見下ろす透の視線が凍てつく様に冷たかったからだ。

絶対零度の視線とはこの事かも知れない……。

テレビで良くみる大企業の後継者、透の顔はまさしくその人物とそっくりだったから、それを指摘しようと思つただけなのに。「これ以上何も話すな」と言つ脅迫めいた眼差しに晒されている。

星奈は口を開いた数秒前の自分を罵りたくなつた。

気まずい沈黙を破つたのは海だつた。

「えつ、タルトタタンがあつたつて?！」

かなり大きい声で叫んだのだ。

親友の置かれている状況に気がつかずに受け答えしているのは離李だ。

「うん。中の黒板に土曜限定つて書いてあつたの

「……ちなみに、美味しかつた?」

「絶品!」

満面の笑みを浮かべた離李を見て、それから海はおもむろに透を見た。

視線が言つている。「も、もつ一個食つていきたいなあ」と。

透はそんな彼に、冷えた視線を送つた。無言で「そろそろ時間だ」と言つたのはどこのどいつだ」と責め立てる為のものだ。

「あ、でもね。明日作ろうかって、星奈と話していたの。だから、このお店には負けるだろ?けど、明日、食べさせてあげられると思つわ」

あまりに分かり易く海が落ち込んでいたから、離季は励まそうと明るく話しかけた。

みるみるうちに彼の表情は晴れて行く。

効果音がついたら、「ぱああああああー！」とでも言つたといふか。

「さすが、離季。ありがとうー。」

がぱりと両手を広げて離季をぎゅっと抱き締めようとした。

ところが、ぎゅっとなつたのは海の首だった。「ぐえっ」と呻いて、その手はすかっと空を切る。

視線を背後に向ければ、冷笑を浮かべた透がそこにいた。

右手が海の襟を握つていて、しかも手首を返していくのだから、首が絞まる絞まる。

透から田を反らしたくて正面を見ると、不審の視線を送つてくる星奈が離季の腕をがつちつ握つて海から遠ざけていた。

そこで彼は手を打つた。

「これが前門の子猫、後門の狼か！」

「誰が子猫ですか！」

麗らかな唇下がり、星奈の怒声が大通りに響いた。

翌日、タルトタタンが焼かれるかどうか、海がそれを口に出来るかどうかは彼の誠意ある謝罪に掛かっていた。

## カフュでのこと、初対面の攻防？（後書き）

読んで頂き有り難うございました。

三話構成なので、これが最終話になります。  
見事にどうでもいい話ですね。

「質問も頂いていたので、種明かしと言つか、解説を。

「カフュでのこと」の元の話は「民の望んだ皇妃」です。  
テーマは、『出会った頃の彼らを現代日本に置き換えたら』です。  
なので、登場人物は以下の通りになります。

離李（すうり、と読みます）　主人公のスウリ。  
透（普通にとある）　皇帝ノールディン。愛称がノールなので、  
ノール、トール、透。無理がありますが、気にしないのが大切です。  
海（かい、です）　クウセルです。日本語の名前でできますか？  
……できませんでした。

星奈（せいな、です）　ウイシェルです。同上。

おまけ。

宗谷　アーノルド・セネガン。なんで宗谷になつたのか、自分で  
もわかりません。

本編での彼らの出会いがこんな風だったかどうかとは全く別の話  
ですので、あまり深く考えず、界軌のお遊びとして受け取つて下さい。笑。

登場人物たちの性格自体はあまりえていないつもりですけど、  
海は物凄い甘味好きになつてますね。おかしいなー。

今後も気の向くままに、投稿済み作品の登場人物たちをいじつて  
いくつもりです。（題材にするのは「民の望んだ皇妃」に限らな  
いです。）

お暇潰しにまた寄つてみて下さい……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9720s/>

---

短編集(パラレル主体)

2011年5月23日08時34分発行